

第一部のあらすじ

物理学者である葉哲泰（イエ・ジョータイ）は、文化大革命の糾弾集会で公開処刑されます。娘である葉文潔（イエ・ウェンジェ）の目の前で。しかも父の死は、母の密告によるもの。葉文潔の人類への絶望が、この壮大な物語を広げていきます。葉文潔は、巨大パラボラアンテナを備えた中国の秘密基地に配属されて、地球文明の情報を宇宙に発信し続けることに。

一方、優秀な物理学者の自殺が多発しているという事件が起こります。そこで、研究者・汪森（ワン・ミャオ）と、テロ対策の警察官・史強（シー・チアン）のコンビで、真相を突き止めようとします。

汪森は、事件の真相に迫るとされた「VR ゲーム」をプレイすることで、地球三体協会の存在をたどり着きます。三体協会は、あの葉文潔が関係している団体。そう、葉文潔が送信していた信号を、三体文明の宇宙人たちが傍受していたのです。三体星人を地球に招き入れて、人類を一掃しようと画策していたことが判明します。三体星人の星では、3つの太陽が不規則な軌道をとっていて、寒暖差が激しい。生きていくのだけで、めちゃくちゃ過酷。だから移住先を探していたんですね。地球はうってつけの移住先だったわけです。ただ三体星人がたどり着けるのは、400年後。それまで人類の進化を妨げるために、「智子」というナノマシンを地球に送り込みます。智子は、人類のすべての情報を収集でき、物理学の発展を止めるためのナノマシン。かくて人類 VS 三体星人の戦いの火蓋が切って落とされます。

第二部のあらすじ

人類の作戦は、智子によってすべて三体星人に筒抜け。ただ三体星人には、弱点がありました。三体星人は、脳で考えていることを電磁波で伝えることができるため、頭のなかで考えることは読むことができないのです。そこで人類が考えたのが面壁作戦。これは、人類最高峰の4人を選抜して、彼らの頭のなかだけで三体星人の侵略を阻止する計略を練ることに。三体星人は、智子を使いながら、どんな計略かを探っていきます。こうして人類の存亡をかけた頭脳戦が繰り広げられます。エンタメ感が増すのが、この第二部です。4人の面壁者たちの企みとは

フレデリック・タイラー（元米国国防長官）

蚊群編隊計画を画策。水爆による特攻プランで、地球艦隊に対する攻撃および消滅を考えていました。

マニユアル・レイ・ディアス（現職のベネズエラ大統領）

水星連鎖反応計画を画策していました。すべての恒星型水素爆弾を水星に配備し、ひざかねを引く準備を整えたあと、それを盾にして三体世界に降伏を強要しようとしていました。

ビル・ハインズ

妻の山杉恵子と共同で精神アップグレード計画を画策し、洗脳装置「精神印章」で対抗しようとしていました。

羅輯（ルオ・ジー）

そして、羅輯（ルオ・ジー）は、三体星人に立ち向かう端緒として、フェルミのパラドックスを考えていきます。フェルミのパラドックスとは、地球外生命体がいるはずなのに、人類が遭遇しないパラドックスのこと。羅輯（ルオ・ジー）は、暗黒森林理論に行き着くのです。相互のコミュニケーションがない、進化スピードが読めない、この2つの条件がある限り、ほかの生命を発見したら、できることは相手より早く引き金を引くことだけ。コミュニケーションの不在は猜疑心の連鎖を産む(猜疑連鎖)。貧弱な技術力しかないような種族であっても、時として爆発的な進化を遂げることもある。宇宙の物質の総量は一定だから、生き残るためにはそれを独占しなくてはならず、異なる知的生命体を発見した際に、まず最初にすべきことは対象を全て滅ぼしてしまうことなのである。羅輯（ルオ・ジー）は三体星人と交渉して、自分の身に何か起こったら、三体世界の座標が全宇宙に送信されると脅します。これにより、人類は巨大な重力波アンテナを地球に構築。抑止力により均衡が保たれたのです。